



『瞳』

オパーリン

やあ、皆さんこんにちは。これから僕が書こうと思っているのは、少し前に僕が体験した奇妙な体験についてだ。その体験は、なんだかあまりにも現実離れしたものであったから、これを皆さんに信じていただけるかどうか、正直に言って僕には自信がない。ただ、この経験について書くという事が現在の僕にとっては是非ともやらなければならない事のように感じられるのである。であるからして今、僕は書き始めている。

また、今これを読んでくださっている皆さんにとってこの話を読むことが何の得になるのか、と考えてみると、考えるまでもなく「何も無い」と断言できる。だからして、これを読んでくれる皆さんがいささかなりとも「楽しんで」くれさえすれば、ただそう願うばかりである。

そのための第一歩として、早速「本題」に入ってしまうおうかと思う。長い前置きなんぞは退屈以外の何物でもないでしょうから。

それでは皆さん、僕の体験した珍妙奇天烈な出来事のお話を、せいぜい楽しんでおくんなはれ。イヒッ。

まずは僕の生い立ちについて少し話しておこうと思います。

僕の両親は、「いたって普通」である事が彼らの人生における最優先事項であり、その事に彼らは人生のよりどころを見出しているかのような人たちであった。

しかしながら、そしてそれはとても残念なことに、僕は産まれついでにの性分からしてそれほど「いたって普通」な要素を持ち合わせてはいなかった。そのために僕は幼い頃から「いたって普通」ではいられなかった。

小学校の時の僕は、学校中僕の名前を知らないものはいない、札付きの問題児であった。落ち着きが無い、先生の話を受けない、のべつ幕なしに奇声を発する、掃除をサボる、身の回りの整理整頓ができない、思いやりが欠けている、女の子の髪の毛に糊を塗りたくる、校舎の壁に泥を擦り付ける、室内でボール遊びをして教室に飾ってあった花瓶を割る、等々、問題児であると思われるに至った理由を挙げればきりが無い。先生に口答えをしては廊下に立たされ、座席は先生の目の前、監視の行届いた「特別席」の常連であった。

そして、さらに残念極まりない事には、僕はそんな「問題児」であったにもかかわらず、自分が悪いことをしているという自覚が微塵もなかった。それゆえに、先生が何故そんなに怒っているのかが不思議でならなかった。今から思うと、その無自覚さがますます先生を苛立たせ、僕を「手に負えない子供」に仕立て上げていった様に思われる。

僕が何か問題を起こす度に母親は学校に呼び出され、ペコペコと頭を下げ、先生に謝っていた。そして家に帰ると鬼のような形相で僕を叱り、折檻するのであった。「いたって普通」が信条の母親にとって、僕が学校で問題を起こすことはこの上もない「屈辱」であったのだろう。

しかしながら、そんな母親の怒りや嘆きは、自覚のない僕にとっては反省を促すものではなく、ただ理不尽な苦痛でしかなかった。「先生もお母さんも、何でそんなに怒って僕を叱るのだろう、僕は何も悪いことはしていないのに。」幼き日の僕は常々そんな疑問を胸に抱いていた。

そんな小学生時代の僕にとって最も辛かったものが「反省文」である。何の罪の意識もない少年が自分を省みて悔い改める事などできるはずもないのである。それでも、先生は書くまでは許してくれない、それを書かされるのは大抵放課後であったから、書くまでは帰れない、つまりは友達と遊べない、理不尽極まりないことであった。仕方がなく少年は筆を取り書き始める、真っ赤なウソを。その内容は以下の様なものであったように思う。

「反省文

僕は今日、じゅぎょう中に友だちのたかしくんとおしゃべりをしていて先生におこられました。それでも、先生の話よりもたかしくんとおしゃべりをする方が楽しかったので、先生の言うことをむししてたかしくんとしゃべっていました。

すると先生がぼくの所に来て、ぶちました。ぼくはなんでたかしくんはぶたないで、ぼくだけがぶたれなきゃいけないんだろうと思って、むかつきました。そして、せんせいに「さべつすんな」と言いました。

すると、先生はもっと怒って「先生に対してそんな口の聞き方をするとはなんですか。」と言って、またぶちました。ぼくはいたくてむかついていたので、「体罰だ、教育委員会にうったえてやる。」と言いました。そしたら、先生はキレて僕をろうかに引っぱり出して、立たせました。

先生にさからうのはいけない事だと思いました。今は反省しています。もうそんなことは二度としません。そして、明日からは先生の言うことにさからわない良い生徒になりたいと思います。」

幼かった僕が自分を偽ることを強制された体験は、取り返しのつかないような傷となって心に残った。自分が自分のままでは社会からは受け入れられない、この体験は僕が初めて社会というものと遭遇した瞬間であったように思う。出た杭であった僕は完膚なきまでに打ち付けられ、幼き僕は抗う術を持たず、ただ打ち砕かれた自己を痛感し、その痛み悔しさをかみ締め、その心に反抗心というものを芽生えさせたのであった。

そしてこの瞬間に、その後の僕の間人としての方向性のようなものが決定してしまったように思う。先生、親、友達、つまりその頃の僕にとっての社会というものは、僕にとっての敵であり、僕はただ一人でそれと戦わなければならない、という認識が出来上がったのである。そして、その認識は少年の心に今に至るまで続く強烈な孤独を植えたのである。その孤独はどこか飢餓感と似ている様に思う。

その後、反抗的な問題児は中学生になり、その傾向にますます拍車をかけた。そして、学校という社会は僕を打ちのめし続け、僕は怒り、絶望、孤独、そういった痛みを刻印のように心に刻みつけ続けていった。

しかし、悪いことだけではなかった。連戦連敗であった僕は一筋の光明を見出したのである。この世に抗う術、たった一つの武器と出会ったのである。それは一枚のCDであった。それはロックンロールミュージックであった。その音楽家の叫び声に、僕は自分をもう一人見つけたような

気がした。その瞬間の喜び、歓喜に魂が打ち震えた。絶叫せずにはいられなかった。すぐに母親が飛んできて、怒って何かを言った。しかし、何も聞こえなかった。ああ、俺は一人じゃなかったんだ。こんなところに仲間がいた。ああ、負けやしない。俺は決して負けやしないぞ。そんな気分だった。

その後も僕は「仲間」を探し続け、手当たり次第にありとあらゆる「表現」をあさった。そして、数多くの仲間と出会った。それはある時はパンクロックであったし、またある時は文学であった。その形態は何でもよかったのだ。そこに自分が抱えているのと同質の痛みが含まれていれば僕はそれに感動し、言いようのない喜びと親近の情を覚えた。

僕は「表現」というものに溺れた、他の多くの少年達がそうするのと同じように。何も特別じゃなかった、いたって普通であった。それなのに何故、僕は彼ら同世代の少年達と友情を深め、孤独を埋めることができなかつたんだろう。どうして、音楽や文学の表現者達としか仲間になれなかつたんだろう。それは多分、その頃の僕が自分に対して、自分の孤独に対して、非常に傲慢だったからだろう、と今になっては思う。

今述べた「表現」との出会いが僕の人生にとっては最も強烈なものであり、今ある僕を決定的に形作ってきたものである。しかし、表現というものは僕が生きるための武器となったことはもう書いたが、それは同時に諸刃の剣でもあった。

僕が出会った仲間達、表現者、とりたてて文筆家達が持っていた孤独、怒り、そういったものは、僕が持っていたものと同質のものであったが、僕のそれをはるかに凌駕する強烈なものであった。つまりは天才だったであつた。そんな彼らに出会い、彼らの魂の燦りを垣間見る度、僕は圧倒され、打ち崩された。凄過ぎるのである。僕の持っているそれなんてものはお話にならないのである。仲間であると思った人達は、僕を置いて遥か先にいるのである。もはや同じ地平上に立っているのかも疑われる。悔しい、とも思えなかつた。ただ、彼らに少しでも近づきたい、そう思うばかりであつた。

こうして僕はますます表現に没頭し、自分の孤独を磨き上げていった。そしてそのことは結果的に、僕と外部をさらに乖離させ、孤独を大きくした。負のフィードバック、悪循環である。行き着く先のない片道切符の道程、それが今僕の中にある記憶の全てである。

そんな孤独の探求の過程で、僕はある思いに囚われる様になっていった。それはつまり、発狂、身の破滅、ということである。

嘘をつかず、ただありのままにしようとするならば、社会と折り合いなどつくはずが無い。それは短いこの人生の中でも十分に、嫌と言うほど思い知った。かといって、今更「すいません、私が間違っておりました。悔い改めますので仲間に入れてください。」なんぞとは口が裂けても言えない。もう引き返せない所まで来ているんだ。そしてそれすなわち、もうこの世の中では真っ当には生きられず、肉体の滅びるまで、破滅へと突き進むしか道はない、ということである。それは百も承知しているんだ。ただそこで問題になってくるのは、その途中かその果てに俺が一番に求めていたものに巡り逢えるか、ということなんだ。一目でもそれを拝めるならば、俺はもうなんの悔いもなく死ぬる気がする。

で、それが何か。それが分からないんだ。何で分からないんだろうか。多分それは俺がまだ自

分が行く道の果てまで達していないからなんだろう。ただ、その果てに達するには何か越えなくちゃならない境界があるように思える。突破、逸脱だよ。そのためにはどうしても発狂ということが必要になってくるんじゃないだろうか、そう思えてならない。

つまり、今の俺が何をしたいかも分からずうろろと迷っているのは、中途半端に未練を引きずっているからであって、それを断ち切って己が求めることの極みに達するには発狂するほかに手立てはないんじゃないだろうか、ということである。

その考えは恐ろしくもあったけれども僕を魅了した。「発狂」、なんと優美な響きであろう。

しかし、それはあくまでも頭の中を蠢いている「こうあるべき」であって、現実はそれに伴わない。発狂寸前、しかし発狂しきれず、求めるも得られず、というなんとも中途半端な状態で、恐怖心が枷になってどうしてもそこから先に踏み切れないのである。それはとてもストレスフルな状態である。

毎日毎日悶々悶悶として過ごし、徒に時をすごす。この世を、すべてを捨てなければ求めるものは得られない、でも怖い、本当は寂しい、誰かと仲良くしたい、幸せになりたい、でもそんなんではどこにも辿り着けない。ジレンマ、ジレンマ。果てることのない思考の堂々巡りが僕を蝕んで疲弊させる。

そんな鬱々とした毎日が続いていた二十歳の夏のある日。生まれてから一貫して転がり続けてきた僕の人生は、毎日休まずにチクタクチクタクと刻まれてきたカウントダウンのアラームは、「チーン」と音を立てて鳴った。

決心したのである。死を。

「今まで二十年間、自分を騙し続けてここまでやってきたけれど、日々状況は悪化するばかり。もう耐えられん。いい事は何も無い。ただ苦しいだけ。夢に魘され現実にも魘される。もう疲れた。やめよう。」そう思った訳だ。

早速遺書を書いた。

「愛するお父様、お母様。先立つ不幸をお許してください。生んでくださった事、感謝しています。あなた方はこんなしょうもない僕に全力の愛を注いでくださいました。ありがたいことです。でも、その愛が裏目に出たようです。毎日が地獄でした。息をするのが困難でした。もうやめます。僕がいなくなっても、どうか幸せに生きてください。一足先に天国で待っています。それでは、さようなら。」

うん、なかなかの出来だ。これで何の悔いもなく死ねる。

で、肝心の死に方であるが、これはもうずっと前から決めてあった。洗面器自殺である。僕は洗面器に水をはり、思いっきり息を吸ってから顔をつける。水の冷たさが気持ちいい。「ああ、これでやっと楽になれるんだな。思えば、俺の人生って本当にいいこと無かったなあ。せめて一回くらいセックスしたかった。でも、まあいいか。水のひんやり感が気持ちいいし。何となく、幸せかも。」

50秒後。

「っ、ブハア。ゲホッ、ゲホッ。ギいやああああああ。苦し！苦し！無理無理。こんなんしたら死ぬし。」

失敗。

予想外であった。まさかこんなにも自分には忍耐力がないとは。これじゃあ子供の我慢比べでも勝てないわ。うむ。考えなければ、新しい方法を。我慢せず、コロッと、しかも痛くなく死ねる方法を。

思案の末、思い至ったのが醤油自殺。致死量が分からなかったのも、とりあえず家にあった未開封の500mlのペットボトルを使用する事にした。

さあ今度こそ。キャップを開け、内蓋を取り外す。準備は整った。深呼吸を一つ。「エイ！」勢いをつけて口一杯に醤油を含んだ。

「っ、ブハア。ゲホッ、ゲホッ。ギいやああああああ。しょっぱ！しょっぱ！無理無理。第一醤油って飲み物じゃないし。」

失敗。

その後も、僕はありとあらゆる自殺方法を試みた。首にタオル巻きつけて両手で引っ張る自殺（五秒で何故か自然と手の力が緩んだ）、逆立ちからの一人パイルドライバー（ベッドの上でやったが首を痛めた）、コーラー気飲み自殺（300ccでリバース）、飛び出して轢かれる自

殺（交通量の少ない小道で一時間待って車が来なかったので断念）、マヨネーズ自殺（醤油と同様）、熱湯ぶっかけ自殺（人差し指を火傷）、金槌で頭割り自殺（ホームセンターで購入、たんこぶが出来た、1300円の出費）、リストカット自殺（すね毛を除毛）、鼻の穴に洗濯バサミでショック死自殺（涙が出た）、パッション式「ソーッ！」で心停止自殺（ソーッ！）・・・・・・・・。

結論、死ぬの怖い。

死にきれなかった僕は打ちひしがれ、絶望のあまりにとりあえず酒を飲む事にした。

部屋に転がっていた焼酎をロックで3杯。僕は気持ちよく眠りに落ちた。

ここまで読んでいただいた皆さん「全然奇妙でも面白くもないじゃん！」「ただの馬鹿じゃん！」「ふざけんな！」「早く死ね！」とお思いの事でしょう。お気持ち察しいたします。まあ、慌てなさんなって。ここからですよ、ここから。奇妙奇天烈摩訶不思議は今から始まるんです。

たった3杯の焼酎で泥酔、気持ちよく眠りに堕ちた僕はその晩、とても不思議な夢を見た。その夢の内容とは以下のようなものである。

まず、俺は夢の中で目覚めた。夜である、真夜中である。そんでもって、夢の中で目覚めた僕は当然それが夢である事に気づいていないわけで、さっきまでのうつつの続きのつもりな訳である。

「酒飲んで寝ちまったか。」なんて思いつつ、目が暗さに慣れてきたので周囲を見渡す。ここで本来ならば、これは夢であるわけだから、見知らぬ原っぱの真ん中であったりして、でも夢であるがゆえにその異常を全然異常とも思わなかったりするのが定番であるわけなのだが、目の前に広がっていた光景は全くもって普通で、そこはいつも通りの汚らしい僕のアパートの部屋である。床には使用済みのティッシュや使用済みの綿棒やらが転がっている、汚らしい僕の部屋である。

で、僕は台所に行き、コップに水道水を注ぎ、グビグビ飲み干す。ついでにトイレに入ってションベンをする。夢の中でションベンをするとうっかり本当に膀胱が緩んでしまって、つまり寝ションベンを垂らしてしまい、気づいて飛び起きるが後の祭り、なんて事が僕の場合は高校2年生くらいまでよくあったのだが、今回は大丈夫であった。

夢だけで用を足し終えた僕は、再び部屋に戻り、布団に潜り込んだ。「明日こそはマジで死ぬのう」なんて思いつつ、再び眠りに落ちていく。という感じでウツラウツラとし始めたその時である。

「ガダン！！！」

ものすごい音を立てて部屋の扉が開いた。当然びっくりした僕は扉の先に眼を向けて、扉を開けた主を確認しようとするわけである。

そこに立っていたのはおっさんである。スーツを着て、髪を七三に分けている。無表情で立ち、じっと僕のほうを見ている。

理解不能。沈黙、というよりも停止。しばらくの間、無言でおっさんと見つめあう。が、当然見つめ合ったからといって、なぜ僕の部屋の入り口におっさんが無表情で立っているのかは分かるはずもなく、理解不能は依然として理解不能である。

どれぐらいだろう。二分程であろうか。僕は突然に部屋に侵入してきたおっさんを見詰め合っていた。しかしながら、依然としておっさんは無言を貫き、無表情で僕を見続けている。僕はといえば、ただ理解不能な状況を脱して、これはどうしたものなのであろうかと思案し始めていた。

まあ、言うなればこんな真夜中にオッサンが勝手に人の部屋に入ってきて、その上無言、無表情だという状況はどう考えても通常ではなく、つまり異常であるわけで、ここで僕が理解不能で

何の反応も出来ないでいるのは至極当然の事である。

僕は、悪くない。が、奴の方はどうだろうか。こんな真夜中に人の部屋に、しかも全然知らない人の部屋に勝手に入ってきたわけで、そうした場合、当然何かそれなりのしかるべき理由があるはずであり、むしろ無いのであればそれはおかしいわけで、それならその理由とやらを部屋の主である僕にまず初めに話すのは道理であろう。が、このオッサン未だに無言、名乗りすらしない。おかしいではないか？

そこまで考えが至ってくると、僕はだんだんおっさんのその無礼さに腹が立ってきた。ここで俺がこの沈黙に耐えかねて「あのお、どちら様でしょうか？」というような、それこそ典型的なリアクションをしてしまったら、それこそ奴の思う壺な訳であり、完全にあちらのペースに持っていかれるのは目に見えている。そうなれば完全に僕の負けである。

そこで僕は考えた。それではこうしてみたらどうであろう、シカト。無かった事にしてそのまま寝る。うん、それにしよう。そうすれば奴も当然驚くと思っていた俺が無反応で寝たとなれば、あせるだろう。となればペースは完全にこっちのものである。

で、俺は計画したとおりにオッサンをシカト、何事もなかったかのように再び眠りにつく、というアクションをやってのけた。やってしまうと実際、もうオッサンなんてどうでもよくなったという感じにもなってしまった。

が、途端。

寝た途端、である。

おっさんは突然に話し始めた。

目覚める瞬間の感覚、起きているんだかまだ眠っているんだか、そのどっちにいるんだかよく分からないぐらいの時、僕はあの時が好きだ。宙ぶらりんで無重力な感じ、それを言葉にしてみようとしてみた所で、土台それは無理な話で少し歯がゆいが、きっと分かるでしょう？あの時の感覚、それをどう感じるか、体が感じるものがそのまま全てみたいなああの感じの感じ方、それは人それぞれ独自のものであるはず。だからして、僕を感じるあのドロドロ状態は僕だけのオリジナルドロドロ状態であるはずであって、そう考えるとなんかちょっと嬉しいような気もしてくる。

とまあ、僕は今そのオリジナルドロドロ状態の後期にいる。つまり、覚醒してむくっと起き上がる一歩手前の状態、まだ起きたとは言えないけれど「うんむ、ぐぐぐ、・・・んむん」とかは言い初めている位のところだ。

眠い。眠い、けれども、いつかは起きなければならない訳で、まあそうと決まった訳でもないかも知らんんだけど、でもね、どうしようか、ああ、眠いな、そろそろ起きてもいいんじゃないかな、てか今日は何曜日だっけ、昨日は学校行かなかったから今日はたぶん、でも俺最近学校行かないしなあ、今日は何曜日だっけ、あ、携帯見ればいいじゃん、携帯どこだ？んんむ、手は動くな、あ、あったあった、パカッとな、ポケモンにポチッとなっというセリフあったでしょ、今それ意識したんだよ、フムフム、今日は日曜日、現在午前10時14分、うむ、そろそろ起きてもいいな、今起きれば一応「朝」起きた事になると思うし、でも眠いな、ってゆーか逆に、日曜日だからまだ寝ててもいいんじゃないのかな、うん、そうだな、いいと思う、イトモー、は見れなくなっちゃうけれど、うん、寝よう。

結局、僕が起きたのは午後三時ごろだった。あのファーストドロドロから、チョイ寝チョイ起きを繰り返しての結果だった。まあ、悪くはない。いつもの事だ。あのドロドロ状態の時には、僕は正常、論理的な判断に基づいて行動する事ができない。生理的欲求が最優先されてしまうのだ。悲しきかな墮落。

しかしまあ、僕は今はもう起きた訳であるし、ということは少し遅くはあるけれどもこれから一日が始まるということなのだよ。くさくさしててもしょうがない。

さて、何をしましょうか。一日の初めということだし、歯でも磨きましょうか。しかし、僕がこう思う事は、僕にとっては非常に珍しい事でもある。なぜなら、僕は基本的に歯を磨かないからだ。それどころか、あまり風呂も入らない。限界まで我慢する。面倒くさいし、必要性を感じないからだ。エコだよ、エコ。

とは言いつつも、今起きてみて、気づけば口の中がすごくヌメヌメして臭い。そういえば、最後に磨いたのはいつだっけ？まあ、歯ぐらい磨いてもよからう、という感じで先ほどの「歯を磨こう」と思うに至った訳だ。

「うんしょ。」

ベッドから起き上がって、床中に転がっている物と物の間を縫うようにして部屋を出る。部屋を出ればもうそこは台所兼出入り口と部屋を結ぶ通路だ。狭い部屋って便利ね、行きたいところにすぐ行けるんだもの。

で、磨きました。グシュグシュ、ペッ、で歯ブラシの臭いを嗅ぐ、くさっ、どぶみみたいな匂いする、はずなんだけど、あれ、しないぞ、おかしいな、いつもは物凄いくさい臭いするのにな、おかしいな、むしろちょっとシトラス的ないい匂いするぞ、調子狂うな、まっ、いいか。ってな感じで磨き終わった。

次。何しようかな、次は。うん、小便。小便しよ。という事で、一步步いて便所へ。狭い家って本当に便利ね。ポチッとな、電気をつけて、扉を開けて、中に入って、おチンチンを出して、皮をむいて。

アレ。

あれ。

that.

アレ。

むけてる。ムケムケ。

いや、むけてるとかむけてないとかいう問題の前に、大きさが。おかしい。長さが。

倍になってる。

しかも右に曲がってたのも治ってる。

え、何で？

朝起きたらチンチンの皮がむけててしかも大きさ倍になってるってどういう事？

という感じで、自らの体に起こった突然の変化に戸惑いながらも、とりあえず出すものは出さなければ、そう思い直し、僕は用を足した。まったくもって不可解である。一晩のうちに急に男性器だけが成長するなんて話は聞いたことがない。何で？まあ、ちょっと嬉しいけどさ。でも、変な病気だったら嫌だなあ。最近は風速行ってないんだけどな、金無いから。いや、まさかね。でも、万一って事もあるしな。潜伏してたのが発病したとか。病院に行ってみようかな。性病科ってどこかにあったけな。でもまだ病気って決まった訳じゃないしな。別に痛くないし。もしかしたら、神様が俺にご褒美くれたのかな、普段の行いが良いからって。

神？

あ？

まさか、

あれ、夢じゃなかったのかな。

あのオッサン。

と思い当たった僕であったが、その予想はまだにわかには信じがたいものであった。だってそうでしょう。常識的に考えて夜中にいきなり自称神が部屋に入ってきて、チンコだけデカクしてしまうって、それが現実に起こった事だと信じられる訳がないでしょう。ありえないでしょう。ってゆーか、どうせ願いを叶えてくれるんならお金くれるとかもって他にやり方があったでしょうに、チンコでかくするって・・・、それが神のすることですかね。でもまあ・・・事実、でかいのである。仕方がない。

とかなんとかグタグタと思いながらも小便を終え、部屋に戻った。

と、その時である。チラッ、と部屋にあった鏡に目をやった。

「!!!。」

絶句したね。言葉が出なかったよ。だって、
鏡の中にはこれ以上無いって位に美しい男の人が立っていたんだもの、
汚らしい僕のパジャマを着てね。

さっきからじっと立ちつくして、鏡に映る見知らぬ美しい男を眺めている。どうやら、昨日夢に出てきた神と名乗るあのおっさんによって、僕の容姿はこの美しい男に変えられてしまった。しかし、心というか人格というか、そういった中身の部分はそっくりそのまま、僕のままであるらしい。

今、この状況から判断できる事は、分かることはそれだけである。それ以上でもそれ以下でもない。余りに唐突に過ぎるので、そこから何の感情もわきあがってこない。ただ、昨日の夢の内容を思い出してみると、あのおっさんはたしか「願いを叶えてあげる」とか何とか言っていた。とすると、俺の願いというのが、こうなることだったのだろうか。分からん。

確かに俺は、まったくもって女には相手にされず、そのことを嘆いてはいた。しかしだね、その問題を解決するとなれば、ただ単に女が寄ってくるようにすれば良い訳であって、なにもこのような変身をさせなくたってよいのではないだろうか。

それはまあ、僕の容姿は美しいほうではなかったかもしれない。うん、美しくはなかった。そして、これといった特徴のない顔たちだったことは認めよう。しかし、しかしだね、そんな顔ではあるけれども、僕は二十年以上あの顔と一緒に、あの顔を僕として生きてきたわけであるよ。それを何の了解もなく、心の準備もなく、一夜のうちにまったく別の顔に変えられちゃったとなるとだね、それはその顔がいくら美しくても、おまけにおちんちんまで立派になったとはいってもだね、やっぱりなんかしっくりとしないし、寂しい気持ちがしないでもないんだよ。うん。とか何とか云々といった具合に、僕は鏡の前に立ちつくして、ゴチャゴチャと何処かに行きつくあてもない考えを頭の中にめぐらせていたのである。しかし、段々とあほらしくなってきた。冷静に考えてみれば、朝起きたらいきなり姿形が変わってしまっているというそのこと自体が、まったくもって常軌を逸した珍事であって、そんなことに対して「何でだろう、どうしよう」とウジウジ悩んでみても、分かるはずも、どうにかできるはずもなく、意味が無いのである。ではこうなってしまった今、俺が真に考えるべきこと、行すべきことは何であろうか。これは明白である。

まず次のことを調べてみなければならない。容姿以外に何か変わってしまっていることはないか。そして、僕のもともとの知り合いは、僕のことを見てどんな反応を見せるのか、つまり、親なんぞはこの変わり果てた姿を見て、果たして僕であると分かるだろうか。甚だ不安である。これはまず真っ先に確かめなければならない。

「よっこらせ。」

机の上においてある携帯電話を手にとり、電話帳を開く。

うむ。

電話帳のメモリーは0件です、という旨の表示がされている。

次。その横においてある財布を調べてみる。

うむ。

保険証、学生証、銀行のカード、その他一切俺が俺であることを証明する物は無くなってしまっている。財布に入っていたのは現金785円、それっきりである。

つまりだ、冷静に、冷静に考えるならば、俺が俺であると認識しているこの俺の心、それ以外の俺に関するものは全て、一つ残らずこの世から消し去られてしまったというわけか。そういうことかな、冷静に考えればね。

あれ、でもそしたら、俺が今いるこのアパートは誰が借りてることになっているんだろうか。だって、俺はこの世にいないことになっているわけだし、親とか友達は消えちまったかどうかは分からないけれども、少なくとも俺とは無関係な人間として存在しているわけだろ、たぶん。

ちょっと気になるな。

てな訳で、押入れの奥から不動産屋の契約書を引っ張りだしてきた。契約者の欄を見してみる。

「契約者、神。」

そう書いてあった。あのおっさん、とことんやってくれるな。まあ、これでもう俺がこの世から抹消されてしまったということは、かなりはっきりとしてしまった。

自分の存在がこの世からなくなってしまった。分かった。口に出して言う言葉では、

「ああそうか、俺は消えたのね」

と、その事実は理解できる。でもやっぱり、その実感というか、それで俺はどんな気持ちなのか、というようなところがいまいよく分からない。にわかには信じがたい、といったところだ。そりゃね、何しろいきなりの事だしね。

だけどね、何だかぼんやりとした、漠然とした、なんだろうこの気持ち、不安、恐怖なのか、自分が水面にポツンと浮かぶ小さな葉っぱになってしまったような、よくわかんないけど、あんまりいい気分じゃないよ。うん、どうしよう。自分はもう何処にもにも存在していないという事実を突きつけられて、せっかくクールに前向きになっていた気持ちが、シュンとしぼんでしまって、また元の「どうしよう、どうしよう」という状態に戻ってしまった。

途方にくれてベッドに腰掛けて、なんとなくまた鏡に眼をやる。何度見てもそこには見慣れない美しい男がいて、不思議そうな、なんとなく困ったような顔をして僕を見ている。彼のそんな顔でさえも、とてもこの世のものとは思えない、美の極みである。いつまで経っても、その美しい顔がいつもの見慣れたあまり美しくない自分自身の顔に戻ることはない。僕は美しい彼を眺めるのにも飽きて、うんざりして、使い慣れた自分のベッドに寝転がる。

「あーあ、やんなっちゃうな。どうしよう。」

この世から消されてしまえば、もうやることは何にもない。二度寝、ふて寝である。理不尽に変えられてしまった現実から眼をそむけるべく、僕は眠りに引きずり込まれていった。もう、起きるもんか、そう思いながら。

午後六時、目覚める。全身がだるく、頭が痛い。寝過ぎた為である。今日は十時ごろに目覚めて、変身させられていることに気づいて、不貞腐れてまたすぐに寝てしまって、一体どれくらい寝たのだろうか。何にもしたくないのにこれ以上寝れないってなかなか辛いことだな、なんて

思いながらも、そろそろ起きて何かしなければなるまい。

この前確かめて判ったとおりに、自分で死のうと思って死ぬのはなかなか難しいことで、勝手に変身させられて社会的に抹殺されてしまっても、こうして息している以上は何とかして飯食って生きていかなければならん。このまま、寝て、起きて、不貞腐れて、寝て、を繰り返すだけだったら、そのうち腹が減ってしまう。腹が減って死ぬっていうのは、それはとても辛く苦しいもので、前に一度「俺は何日食わないでいられるのか」試して見たことがあるのだけれど、記録は18時間だったな。牛丼屋に駆け込んで、飲む様にして牛丼を食べたなあ。あの牛丼はたいそう美味しかったっけ、はは、懐かしいな。

って、ノスタルジアはいかんよ。それはいかん。今、俺がまずしなくちゃならないことは、考えることでしょうか、これからどうするかを。ほら、そんなことを考えていたら、何だか腹が減ってきたぞ、うん、お腹空いたなあ、そういや朝から何も食べてないもん。あ、でも俺、一円も持ってないぞ、冷蔵庫に何か残ってなかったっけ。

冷蔵庫の中を確認してみたけれど、やはり、というべきか、何も入っていなかった。神は徹底している。さて、困ってしまったね、本格的にね。俺にはもう親もいない、友達も知り合いもない、戸籍もない、働けない。どうしよう。考えなくちゃ。あれ、何だかグルグルと廻って帰ってきてしまったぞ。まずいな、このグルグルはまずい兆候だ。しっかりしろ、冷静に、筋道たてて考えるんだ。

考えることしばし。俺は結論に達した。それは以下の通りである。

つまり、だ。俺は突然に、そして理不尽に、神によって俺が今まで持っていたもの全てを奪われた。そしてそれと引き換えに、ただ一つこの人間離れした美しい容姿だけを、だけを与えられた。その上まだ生きている、つまりまだ死ねない、生きなければならない。

以上のことをふまえ、神が俺に与えたもうたメッセージを予測するならば、それは、「生きろ、俺が与えたものだけを使って。」

ということだろう。うん、そういうことだろう。実にシンプルだ。そしてもう俺に選択の余地は与えられていない。

分かった。理解した。十分に悟ったよ、神よ。クヨクヨしている暇もないって事ですね。牛丼、牛丼。

僕は部屋を出た。

生きよう、牛丼食べよう。そう思って部屋を後にした僕が今立っているのは、僕のアパートから程近い歓楽街の一角である。今俺は「立っている」と書いたが、正確には「立ち尽くしている」。途方にくれてしまっている。

「できない。できっこない。知らない女の人に声をかけるなんて、できっこないよ。」
ブツブツ、ブツブツ。そう、俺が部屋で考えついた方法とは「ナンパして飯をおごってもらう」というものだったのだ。「なんと安直な」とおっしゃる片がいらっしゃるかもしれないが、考えてみていただきたい。全てを奪われ、ただ美貌だけを与えられたこの僕が生き延びるために、他にどんな方法があるというのか。

しかし、僕は一つの事を見落としていた。僕は全てを奪われたつもりでいたが、ただ一つ残されたものがあった。そして僕はそれを見落としていた。ただ一つ残されたもの、そう、それは他ならぬ僕自身である。そしてそれが今、このナンパ作戦を遂行する上での大きな問題になっているのである。

しかしまたどうして、「僕」が問題であるのか、それを説明しなければならないであろう。まあ、これを説明しだすと長くなってしまふのだけれども、ここでそんなことを一々事細かに説明していても何も始まらないので、簡単に、大幅にはしょって話そう。

つまり、だね。僕は齢二十一にして生粋の童貞である、とまあ、そういえば皆さんお分かりいただけるだろう。性にオープンなこの現代日本において、二十一にもなって未だに女を知らぬ、それはまあ大きな問題であり、そんな輩はひどく肩身が狭いどころか、社会からの風当たりはそれはまあたいそう強いなんてものではなくて、もはや「童貞は人にあらず」とでも言わんばかりの差別、辱めを受けるのである。巷ではうら若き乙女どもは童貞を見つけては

乙女①「ほら見て、あの人二十一にもなるのにまだ童貞なんですって。」

乙女②「いやん、うそお。信じられない。ありえない。きもい。汚い。」

乙女①「あ、こっち来るわ。いや、なんか臭いわ。」

乙女②「いやん、臭い。てゆーか、うつるわ、童貞がうつるわ。」

乙女①「そうね、うつるわね。逃げましょう。」

乙女②「いやん、来ないでえん。うつるうわん。」

というような会話をしているとかいないとか、とにかくまあそれ程の嫌われっぷりだそうである。もはや蠅一匹寄ってこない、そんな有様である。

その様ないわれなき差別を受ける日本の童貞たるや、それはそれは悲惨なもので、もはやそんな状況で正常の精神状態を維持することなどほぼ不可能である。コンプレックス、世間への憎悪、溜まり続ける性欲、そんなこんながない混ぜになって、狂人一步手前、それが童貞の現状である。

そんな眼も当てられないような童貞、であった僕、それだけが残されてしまったのである。いくら上っ面だけをすげ替えようとも、そう簡単に女性と会話できようはずもないのである。いわんやナンパをは、である。婉曲である。もし、声をかけた女の人に「キモイ、死ね」何て言われて、冷たい侮蔑の視線を浴びせられたら、ああ、そんな事されたらもう生きていけない。

いやあああー。

しかし、そんなことも言っていられないのも事実である。ここでナンパできなければ俺は餓死するのみなのである。それに俺は昔の俺とは違う、何ととっても容姿が美しくなったのである、もしかしたら上手くいくかもしれないではないか。いや、むしろ上手くいくだろ。世の中そんなもんだろ。いや、それよりも、今、俺は一回の成功失敗を問題にできる立場にないんだぞ。やるしかないんだ。そうだ。やるぞ。やったるぞー。うおー。

グルグル、ぐるぐる、俺は心の中でアップダウンを繰り返しながら、なにか踏切りがつかず、ただブラブラと歩き、歩くうちに自然と公園にいた。ベンチに腰を下ろす。ポッケからハイライトのメンソールを取り出す。ライターで火をつける。一息吸えば、口の中に広がるメンソールの香り。ふう。これが一番落ち着くな。そう、落ち着かなければいけないんだよ。あ、でももう三本しか残ってねえや。本当に何とかしないとなあ。

ゆっくりと、それでも確実に、行動の時は近づいてきているのが分かる。それにつれて、具体的な行動の形も決まってくる。まずは、あれだ、どんな女性に声をかけるのか。やはり、三十中頃、そのくらいに見える人に声をかけるのがいいだろう。で、上等な洋服、アクセサリーを身につけていて、背筋のシャンと伸びたのがいいだろう。そんな女性なら、お金に余裕もあるだろうし、僕にご飯を食べさせてくれる可能性は高いのではないだろうか。そんな気がする。

で、そんな女性を見つけたら、何と声をかければよいのだろう。

「へい、カノジョ、俺にご飯おごってくれないかい。」

うわ、駄目ですね、これは。うむん、分からないけれども、声をかけることができたならば、自然と後は上手くいくのではないかしらん。まあ、やってみましょう。

こうやってやることを決めてしまうと、何だか意外とすっきりとしてしまって、妙に落ち着いた心持になった。

公園を出て、再び街角に戻り、今度は街行く女性を観察して、吟味するまでに至った。太っている人、綺麗な人、地味な人、派手な人、足の太い人、不機嫌な顔をしている人、半笑いの人、巨乳、などなど。そこいらを歩いている、顔も知らない他人を観察する、思えばそんな事したのは初めてではないだろうか。この人たち一人ひとりとは一体どんなことを考えて、何処に向かって歩いているのかしらん。

そんな事を考えながら人間観察をしていると、なんだか楽しくなってきたら、肝心のご飯を食べさせてくれそうな女性を探すのが疎かになってしまい、お、これはいかん、気を引き締めなければ、というような具合に何度も仕切りなおさなければならなかった。

観察、探索を始めてどれくらい経ったろうか、僕が探しているようなセレブリチイな女性はないかなかなか見つからず、いや、何度かはそんな女性も通りかかったのかもしれないが、声をかけることができず、観察にも飽きてきて、僕はもはやポッと待ち行く人を眺めているだけの状態になってしまっていた。

「なかなかいないね。」

そんな独り言をつぶやいてみたりして。いつもの癖で、ニキビでも潰そうとして頬に手をやっ

てみるも、もはや僕の肌はツルツルの完璧でニキビなど一つもなく、手持ち無沙汰だったりして。

と。突然に眼に映ったのだ。先ほどの条件にピッタリと当てはまりそうな奥方が。おそらくは30中頃、体はすらっと細く、華奢、すっと通った鼻筋、聡明そうでいてどこか挑発するようなその瞳、満ちあふれる自信とお色気、艶やかな輝きを放つ長い真っ直ぐな髪、シックで上品なお洋服、何だか見たことのある模様のついたバッグ。指輪やら時計やらもしているけれども、それはよく分からん、きっとお高いのでしょう。

はあ、美しい。ため息が出るほどに。有閑マダム。僕はあなたのツバメになります。とまあ、何とか美しいご婦人を発見し、僕はその人にご飯を食べさせてもらうべく、声をかけるべく、ふらふらと吸い寄せられていったわけである。

花にたかる蝶のごとく、ヒラヒラと舞い近づき、その距離2、3メートル位にまで近づいたのだろうか。薫る、熟女の芳香。甘く、酸い、ええ匂いじゃ。恍惚。

が、ふと我に帰る。このご婦人に声をかけなければならんのじゃったわ。バクッ、バクン。急に動悸が激しくなってしまった。顔が上気する。いや、無理でしょうが。こんな美しいご婦人に声をかけるなんて、とても、とても。死んじゃうわ。いや、でもやらにゃいかんのじゃった。あ、でも俺も美しいんだっけ。それ、本当か？いや、やっぱり無理。でも、そうしたら腹減って、アボボ。キヒーン。

思考停止。気づくと僕はそのご婦人を通せんぼするような格好で、目の前に立ちふさがってしまっていた。ご婦人、少し驚いたように僕を見る。ヤバイ、何か話さなくては。全身から噴出す、汗。真っ白、頭の中。

「ア、あの、すみません。」

「はい？」

僕をマジマジと見つめ、怪訝そうに少し首を傾げるご婦人、その口元が微かに笑ったように見えた。瞳に、吸い込まれる。

「いきなりで申し訳ないんですけど、今僕、一円もお金がなくて、そのうえ戸籍もなくなっちゃって、働けないもんで、とても困ってしまっていてですね、大変申し訳ないんですけどもですね、あのですね、何か食べる物、そう、ご飯の方を奢って頂けないでしょうか？」

しどろもどろ、めちゃくちゃな日本語で一氣にまくし立てた。

沈黙。

ご婦人の瞳はまじまじと僕を見つめていた。僕もその瞳を見やり、映し出すものをうかがい知ろうとしたが、その瞳はただ黒く、見つめる程にその奥へ沈み込んでいく、それだけであった。

「いいわよ。」

その瞳にばかり気をとられていた僕は、自分が頼み事をしていただけだということを忘れており、その声が唐突であるかのように思われて驚いてしまった。その隙に僕の視線はご婦人の深く真っ黒な瞳から外れてしまい、再び眼を戻すと、彼女のそれはいたずらをはらんだ物に変わっていた。

「坊やは何が食べたいの？」

そうだ、私はこのご婦人に飯を奢ってくれと話しかけたのであった。そもそもがそんな前向き

な返事を想定していなかったの、彼女の言葉の意味を理解するのに時間がかかってしまったのだ。そして、遅ればせながらその内容を理解した途端に、驚き、急にドキドキとしてしまった。だって、想定外なのである。

「あ、あわ、本当にご飯食べさせてくれるんですか？」

上ずった声で聞き返してしまう。

「あら、だってあなたがお願いしたんでしょう？なんで聞き返すの？気が変わっちゃうわよ、ウフフ。」

ご婦人、僕の様子に可笑しそうである。

「いや、前向きな解答が得られるとはこれっぽっちも思っていなくて。それで面食らっちゃって。はい、すいません。」

「あなた、おかしな話し方するのね。ま、いいわ。坊やは可愛いから許してあげる。さ、行きましょうよ。」

「は、はい。」

ご婦人は僕の腕を取り、すたすたと歩き出す。水を得た魚よろしく生き活きと輝いている。僕は何が何だか、困惑しきりで、借りてきた猫のように大人しくなり、ご婦人に引きずられて行くのであった。

ご婦人に連れられて入ったのはその入り口からして怖気怖づいてしまいそうな焼肉屋さんであった。今までに入ったこともないし、このままでは今後入ることもないだろう、そう思わせるお店であった。

座敷に通されて腰を落ち着けてもなんだか落ち着かない。どんな人がこんなお店に来るのだろうと思い、キョロキョロと周りを見渡して見たいものだが、あいにくと席が個室である。

店員が水やらお絞りやらを持ってきた。その時ちらと僕を見て鼻で笑った気がする。まあ、仕方のないことだ。そういう店なのだから。そんな僕の様子が可笑しいのか、ご婦人はニヤニヤしながらお品書きを手渡してくれた。

「ここ、美味しいのよ。」

「いや、でも随分とお高いんじゃないでしょうか。カルビなんか一人分で3000円もしますけど。」

「あら、気にしなくていいのよ、そんなこと。」

「いや、でも。」

「ふふ、楽しみましょ。」

ご婦人はお金持ちのようだ。店員を呼んで、とても二人では食べきれないような量を注文している。もし仮に見栄っ張りだったとしても、普通の人間にここまではできないだろう。

運ばれてきたお肉はたいそうな代物であった。綺麗な桃色の赤みにきめ細かい霜が入っている。肉もここまできると色気を放つと知った。

そして、それからしばらくはあまり記憶が無い。口に入れると溶ける肉、タレではなく塩でいただく肉。食べているというよりも、まったく新しい刺激、それそのものを楽しむための行為であるかのようだった。

ようやく満腹になった頃から記憶が再開する。

顔をあげるとご婦人がニコニコと僕を見ている。ずっと僕の食べる様子を見ていたのだろうか。そういえば肉に夢中でろくに話もしていなかった。急に申し訳なくなって話しかける。

「すいません、あまりに美味しくて話すのも忘れちゃってました。」

「ふふ、お腹一杯になった？」

「はい、今すごく満たされています。」

「それならよかった。君、名前は何ていうの？」

「ああ、そういえば名乗るのも忘れていましたね、すいません。僕は・・・、あれ？おかしいな・・・。」

そう、名前が思い出せないのである。きっと、あの神と名乗るおっさんは名前もろとも僕の存在を消し去ってしまったのだろう。それにしても、自分の名前が無いとは困ったものだ。このままでは僕がご婦人に名前を教えたくないのだと勘違いされてしまう。うーむ、困った。美味しい焼肉までご馳走していただいたのに名乗りもしないなんて、なんとも失礼な話ではないか。

仕方が無いので僕はこれまでの経緯をご婦人に話して、名前まで無くなってしまった事を理解してもらおうことにした。

「・・・という訳ですね、その神とかいうおっさんのせいで僕は僕であるという証拠を全て消し去られちゃったんですよ。まあにわかには信じがたい話でしょうけれど。」

「ふーん、それは随分とお気の毒な話ね。でも、名前が無いと困るわね、私だって君のこと呼ぶのにいつまでも「君」っていうのも変だし。」

「そうなんです。」

あまりにも現実離れした話なので、ご婦人は怒りだしてしまうのではないだろうかと心配していたのだが、ご婦人はあまり気にしていないようだったので、僕は少し安心した。

「うーん、じゃあ私が君に名前付けてあげるよ。」

「え、本当ですか？」

「えーっと、どんなのがいいかな。」

ご婦人はしばらく考えてから、こう言った。

「うん、決めた。今日から君の名前はポチね。どう、いい名前でしょ？」

「なんか、犬みたいな名前ですね。まあ、いいですけど。」

あんなに考えていたのに思いついた名前がポチだなんて、僕はすこしがっかりしてしまった。

「なに、あんまり気に入ってないみたいね。いいじゃない、名前なんて。あ、言ってなかったけど私はレミっていうの。よろしくね。」

そうやって、レミさんはニコツとした。その瞳の奥は何か嗜虐的な光があった様に僕には感じられた。

「はあ。」

こうして僕の新しい名前はポチになり、ご婦人はレミさんになった。レミさんは僕にポチと名づけたことで何か満足したみたいで「ポチ、ポチ」なんて言いながら僕の頭を撫でたりしている。まあ、こんなに綺麗な人の犬にされるのだったら、そんなに悪い気はしない。お手でもしてや

ろうかしら。

「ねえポチ、あなたこれからどうするの。」

「いえ、僕はもう社会的に抹殺されちゃったみたいなんで、特に何にもすることはないですけど。」

「そう、暇ってことね。じゃあお酒のみに行きましょうよ。今日名前が付いたってことは、帰郷はあなたの誕生日なんだから、ペアッとやりましょう。」

「でも僕、ペアってやるようなお金ないですよ。こんなに高級な焼肉もご馳走してもらっちゃったし。」

「いいのよ、気にしないで。私、あなたのこと気に入ったから当分の間は面倒見てあげる。いいでしょ、ポチは暇なんだし。」

「はあ、なんかすいません。」

「いいのいいの。じゃあ、行こう。」

この時点で、僕はレミさんの犬「ポチ」として飼われる事が決まった訳であるが、それもまあいいかなあ、そう思った。今までの僕という存在が消され、僕はもうこの世界に存在しないのと同じになってしまって、レミさんの言う通り「暇」になってしまった訳であるし。

もし仮に、あの神とかいうおっちゃん僕を消さなかったにしても、前の僕に特にこれとってやるべき事があったのだろうかと考えると、それもよく分からない。愛する人も友達もいなかったし、勉強にも興味が無かったし、かといって仕事があるわけでもなかった。何もしないで部屋に閉じこもってただ本を読み、鬱々と恨みと憎しみだけを心に溜め込んでいた。こんなはずじゃない、ここで終わるわけにはいかない、俺には何かがあるはずだ、他人には無い何か、と。あの頃の僕は果たして生きていたのだろうか、社会的に存在していたのだろうか、果たして今と何か違っていたのだろうか。

そう考えてみると、もしかしたらあのおっちゃんは本当の神だったのかもしれない、そう思えてきた。何もしない、ただ生きているだけ、行き着くあてのないコンプレックスと誰かと触れ合いたいというやるせなさとの永遠にも思える往復の繰り返し、それだけが感情の起伏。そんな俺に機会を与えたのかもしれない「じゃあ、まっさらになってやってみろや」と。

やってみよう。僕は今日からレミさんの犬「ポチ」になって、精一杯彼女を喜ばせよう。彼女の喜び、それが僕の喜びとなり、生きる糧となるように。

そこまで考えて、席を立ててレジに向かうレミさんの後ろ姿を見た。長く真っ直ぐな髪が光を反射して輪のように輝いている、綺麗だ。

視線に気がついたのか、レミさんは振り返り、僕を見てニコッと笑う、ニコッと。

「ねえ、早く行こうよ。」

「はい。」

僕は慌てて靴を履き、レミさんの後を追った。

気がつくと、巨大なベッドの上にいる。部屋を照らしているのは隅にある小さな間接照明だけで薄暗い。ここは何処だろう。そう思って体を起こす。頭がぼんやりしている。酔っ払っているんだろう。ここが何処で、何でここにいるのかも思い出せない。

レミさんと焼肉屋さんを出た後、小さなバーに入ってしこたま飲んだんだっけ。酒の味は高くても変わらないもんだなあ、と思った記憶がある。で、そこからは何も憶えていない。ガチャ。

扉の開く音。そのすき間から黄色い光が漏れる。黒い人影。立っていたのはレミさんだった。体にバスタオルを巻いていて、黒い髪は濡れている。入浴後、という感じだ。

ほのかに笑みを浮かべ、僕を見つめながら歩いてくる。ベッドまでくると僕の横に腰掛けた。シャンプーのいい匂いが鼻に香る。

「起きたんだ。」

「はい。ここ、何処ですか？」

「ホテル。」

ホテル。僕は何と答えればいいのか。僕はレミさんを見た。レミさんも僕を見ている。

レミさんは黙ったまま手をのばして僕の髪を触る。その指先は頬を伝って、唇をなぞり、僕の口の中に入る。舌は彼女の指先を知覚する。舐めてみるとレミさんの指もそれに答える。暫く僕の舌と戯れた指はそっと口から出てゆき、また手に戻って僕の目蓋を閉ざした。

柔らかな感触が唇に触れる。恐る恐る舌を伸ばし触れてみると、その柔らかな物も濡れていて、それがレミさんの唇だと分かる。彼女の口の中に下を入れると、そこにも舌があって、同じだ、と思って安心する。

顔を離して眼を開けると、レミさんが僕を見ている。彼女は今何を思っているのだろうか、それが知りたくなって、瞳を覗き込んでみる。でもそこには何も映ってはいなくて、僕には何も分からなかった。

レミさんが笑っている。体を寄せ、僕の耳元でそっと話しかける。

「今まで、こういう事したことある？」

「・・・、少しは。」

「ウソつき。」

ゾク、僕は芯まで剥きはがされてしまった気がして、急に恥ずかしくなった。絶望、それに近い。また僕の眼を見る彼女。

「私には分かるの。何でも分かるの。瞳を見れば分かるの。」

彼女は僕を抱きしめて、そっと頭を撫でてくれる。そしてまた耳元でささやく

「寂しかったのね、恐かったのね、痛かったのね。もういいのよ。もう大丈夫よ。あなたの、そのままでいいんだからね。」

急に、僕の中で湧き上がってくるものがあって、抗し難く、僕はレミさんを押し倒し、貪り付いた。体に巻きつけられた白いバスタオルを引きはがすと、重みを湛えた白い乳房が剥き出しになる。それに吸い付き、細い体を強く抱きしめる。彼女が呻く。レミさんの中でも僕と同じ物が

湧き上がっているんだ、そう思うと嬉しくて、より一層に自分の中が彼女を求める気持ちで一杯になっていくのであった。

衝動に溺れる中で、また不安な気持ちが顔を出して膨らんできたので、体を起こして彼女を見つめる。艶のある潤んだ瞳が僕を見ていた。ああ、彼女もまた僕を求めている、僕がそうするのと同じように。

が、そこまでであった。急に心に薄い膜が張ったようになって、僕を隔てた。僕は息ができなくなって苦しさを感じた。そしてそこにいた彼女が急にいなくなってしまったように思えた。目の前にあるのは残された抜け殻、肉の塊。

それはとても辛いことのように思われ、今一度彼女の核心にありつきたくて、僕は彼女の身体を弄ってそれを探した。しかし、一度消えてしまったそれは、もう何処にも見つからなかった。彼女はまた潤んだ眼で僕を見つめていたし、僕を求めてくれていることは分かったけれど、もうどうにも駄目だった。

何が変わったんだろう？変わったのは彼女ではなく僕の方だろう。結局のところ、次にどうすればよいのか分からなかったのかもしれない。欲求が湧き上がるのは一瞬の事で、僕たちはすかさずそれを捕まえて、二人で次々と昇華させてゆかなければならなかったのではないだろうか。でも、僕は未熟であったから、それと知らず、持続するものと思い込んで取り逃がしたのだ。

僕は精一杯困った顔をして、彼女に笑いかけるしかなかった。こうなるともう、言葉というものは出てこないものなんだなあ。瞳で、仕草で、伝えるしかないんだなあ。

彼女も僕がそれを取り逃がした事に気がついたようで、とても優しく、僕を包み込もうと微笑み、身を起こして僕を抱き、口付けをしてくれた。その所作は僕にこう語りかける。

「やりたいようにやってみたけれど、駄目だったのね。見失って迷ってしまったのね。いいのよ、それでも。何も変わりはない、何も失ってはいないわ。ただそのままでいいのよ。今度は私がしてあげるから。」

それは口で発せられたものではなく、彼女を通して直に僕に伝えられた。そんなことは初めてで、それはとても心地よかった。僕は落ち着きを取り戻して、彼女に身を任せ、その中でまた彼女を求めたいと思った。そんな僕を彼女は導いてくれる。

レミさんは、優しく、ゆっくりと、しかし迷うことなく昂ぶり、僕を昂ぶらせていった。こじれた紐を解いていく様に。

そして、その時が来る。僕はベットに寝かされ、跨るレミさんを見上げる。彼女は我が子を抱く母親のように微笑む。ゆっくりと腰を沈め、僕は彼女の中に帰る。

「あったかい。」

「だって、生きてるんだもの。」

彼女はそうやって僕を慈しんだ。

ゆっくりと、規則的に、押し寄せる波。その一回一回が僕を溶かし、僕は段々と海と混じり合ってゆく。その中で頂が見えてくる、あそこが僕の往きつく先だ。そこには彼女がいて、僕を待っている。波に揺られて、ゆっくりと近づいていく。

もう少し、

もう少しだ。

ああ、

もう待ちきれない。

僕は駆け出して、彼女を抱きしめる。

まばゆい光が差し込み、目の前が真っ白になって、何も分からなくなった。

カーテンのすき間から差し込む朝日が眩しい。隣にはレミさんがいて、小さな寝息を立てている。身を起こそうとすると身体は少し気だるく、それが昨夜の余韻のように感じられて、また穏やかな喜びを感じる。

幸せ、充足、およそそういった類のものとはかけ離れた暮らしをしてきた自分ではあるが、それはこういった瞬間に感じるものなのではなかろうか。この瞬間を切り取って記憶として保存するならば、それは満ち足りていて、何一つ欠いているものは無い。

しかし、僕が身を置いている今という連続性の中では、この瞬間も未来への予感というようなものを内包していて、それは今この瞬間とはいささか様相を異にしている。つまり、今が思い描きうる最高の瞬間であるというならば、それは時間の経過を経過という必定によって崩壊に向かう他に道は無いのだ、という予感である。

そんな予感が僕の胸の内を掠めたその瞬間から、それは僕を捕らえ、心を侵食してゆく。予感は今まさに進行している現実に形を変え、止むことなく加速し、膨張していく。

気づけばもう、何か決定的なものが既に失われた後であった。嘆き悲しむ暇も無い。ただ、僕がその変化を認識できているということだけが一つの救いなのかも知れない。何から何まで分かっている、次にしなければならないことも。それは喪失の確認、証明という作業である。

身を起こし、ほんの少し前に感じていた優美な倦怠感が、文字通りに気の重さになり果ててしまっていることに絶望する。ベットから立ち上がり部屋の入り口の近くにある姿見の前に立つ。

やはり。だが分かってはいても心はざわつくのだな。絶世の美男子はいなくなり、そこに立っていたのは元のままの自分自身であった。いや、待てよ。果たして、元の自分などというものが存在したのだろうか。ここに立っているのは本当に昔僕であった僕なのであろうか。そう考えると、美男子に変えられる以前の自分の姿というものははっきりと思い出すことはできない。となると、今ここに映し出されている男が誰なのかも分からなくなってくる。ああ、面倒くさい。一々定義づけすることに果たしてたいした意味があるのだろうか。確固としたものも持たずにただ瞬間ごとに蠢いている煩悩に名前をつける意味なんて無いのではないのでしょうか。

ここまで考えてから再び鏡を見てみれば、そこに立っていたのは見ず知らずの醜い男であった。ただ憎悪の対象としかならないような、そんな姿形であった。

「あーあ、魔法が解けちゃったのね。」

背筋が凍る。

「本物は汚いね。」

振り返って見れば、ベットに腰掛けていたのは言葉を絶するような醜女であった。しかし、そいつが先ほどの声の主であり、その声は紛れ無くもレミさんのそれであった。

あまりのことに、何も考え付かず、何も言えない。ただ啞然として目前にある醜悪な物に眼をやるばかりである。果たしてこれがあの美しく優しいレミさんなのであろうか。他人の変化の方が自分の身に起こるよりも驚きが大ききようだ。ましてやそれが昨日自分が褒め称えたあの美しき方であったのならばなおのことである。

「ふふ、驚いているみたいね。」

その醜い物は笑っていて、別段驚いた様子も無く落ち着いている様子である。僕の内には未だに何の感情も湧き上がってはこない。状況を、眼に映る光景を受け入れられないからだ。こんなものを受け入れたのならば、全てが壊れてしまう、苦悩の末に手に入れたものが僕の手の内から消えてしまう。

そんな僕を見透かしたかのように、その醜い物は言葉をつなげる。

「まだしがみ付いていたいよね、玩具みたいな昨日の夢に。そんなに嬉しかったの？哀しい男。ねえ、そんなもの初めから無かったのよ。今あなたは現実を眼にして驚いているみたいだけど、子供みたいにイヤイヤって首を振っているけれど、今日の前に移っている私もあなたも、昨日と何一つ変わっていないのよ。いえ、昨日の私たちも本当はこんなに汚かったと言うべきかしら。ただあなたが見ていなかっただけなのよ。」

「・・・そんなの、ウソだ。」

それだけ言うのが精一杯であった。そして、僕の内にはじめて湧きあがってきた感情、それは嫌悪、どす黒い粘々とした嫌悪であった。それはあつという間に僕を飲み込み、僕は息ができなくなって、苦しくなった。

それでもあいつは言葉を続ける。

「あら、随分と苦しそうね。そんなに嫌かしら、醜いということが。そんなに辛いかしら、自分の求めるものが手に入らないということが。可哀相な男、もう少しあなたのオママゴトの相手をしてあげてればよかったのかしら。」

「や、やめろ・・・。」

「でもね、あなたも判っていた筈よ。あれがウソだってことも、こうなるということも。だって、これが現実なんだもの。そして、あなたも私もこの汚くて何の望みも無い世界に生きているんだもの。いつまでもウソはつけないわ。いずれ、見なくちゃいけないのよ。そして決めなくちゃいけないの、どうするかを。だって、生きてるんだもの。」

「あ・・・、うう。痛いよう。苦しいよう。」

レミさんは優しく僕の頭を撫でてくれる。

「ねえ、死にたい？殺してあげようか？」

「ああ、死にたい。君に、殺してほしい。」

「そう、あなたの望むものは何一つ手に入らなくて、あなたの内にあるのは最も嫌悪しているものだけなのならば、もう生きていたくないの？それを見なくちゃいけないなら死んじゃうの？」

「ああう、やめてくれ。いじめないで。」

「そうね、そんな奴、死んだ方がいいかもね。そんなに弱いんじゃ、このまま生きてても、意味無いもの。私、あなたに失望したわ。残念だわ。勝手に死んで。さよなら。」

「ああ、待って。置いてかないで。」

見上げるとそこには昨日のレミさんがいて、レミさんは哀しそうに僕を見て泣いていた。

「ねえ、わたし嬉しかったのよ。昨日あなたが声をかけてくれて、あなたを見た時、あ、この人なら大丈夫かもしれない。あれを見ても生きることができるともかもしれない。そう思ったのよ。あ

あなたの瞳には孤独がたくさんあって、それでも生きたい、っていう強い光があった。だから、信じたのよ。なのに、なんで逃げるの？なんで眼をつぶろうとするの？見つめなさいよ、この世界を。睨み付けなさい、心を憎しみで燃やしてでも。そして生きなさいよ、血反吐をはきながらでも。それがあんたのやり方でしょうが。それがあんたのただ一つの武器なんでしょうが。」

全身が不思議な感動に包まれていた。どうしてだろう、どうしてこんなに大事なことを見失ってしまっていたんだろう。レミさんが僕に言ったこと、それはいつもあの一人ぼっちの部屋の中で考え続けていたことだったじゃないか、これだけは決して忘れまいと思って。思うとおりにならない現実、悪意に満ちた世界、何者でもない自分、それを直視することは痛みをともなう。しかし、その痛みは僕の生きる糧になり、僕の存在を研ぎ澄ましてくれる。そして僕は僕という磨きぬかれた刃でこの世界を切り裂く。そう、生き抜くんだ。

レミさんがその両手で僕の顔を包み、見つめている。愛しい人、僕を励ましてくれる人、僕に気づかせてくれる人。切なさがこみ上げてきて、僕は彼女をひしと抱きしめる。

ああ。

「レミさん。思い出したよ。僕は生きなくちゃいけないんだ。這い蹲って。僕はこの世界を睨め付け続ける瞳だった。ありがとう。」

「そう、もう忘れないで。」

「うん、もう迷わない。」

生きた身体の温もりを抱き、もう迷わぬ、そう心に誓いながらも、ふと思う。僕はどのように自分を見失ってしまったんだろう？幸福を押しつけて疑念が嵩を増してくる。

「ねえ、レミさん。」

「なあに？」

「でも、どうして僕は一番大事なことを見失ってしまったのだろうか？」

抱き止めてレミさんを見れば、もうそこにいるのは彼女ではなく、あの醜い物である。そしてそれは冷たく笑っている、今頃気づいたかとも言うように。

「それは、お前が人間だからだよ。お前がその瞳に映ったものしか見るができないからだよ。」

僕は石のように固まって、脆くも無音のまま、崩れ落ちていく。

「ふふ、それがお前の限界なんだよ。お前は迷い、矛盾を越えられない。何処にも辿り着けない。だって、生きてるんだもの。」

「じゃあ、やっぱり、駄目なのか。」

目の前にいた醜いものは、いつの間にかあの神とかいうおっさんに変わっていた。しかし、どこか荘厳な雰囲気漂っている。そんなおっさんが口を開く。

「まあ、早まるなって。一つだけ、方法がある。お前がお前のまま、この世界に染まらずに世界を見つめる術が。」

「ああ、教えてくれ。俺は、もう何も失いたくない。傷付きたくないんだ。」

「そうか、分かった。じゃあ、そうしてあげよう、お前の望むままに。」

「あ、ありがとうございます。で、ど、どうすればよろしいんですか？」

おじさんは僕が今まで誰の表情からも窺ったことの無い種類の優しさを僕に向けている。これが

慈愛の念というのかもしれない。そして、その手をそっと僕の眼に当てて、目蓋を閉じさせる。

「私に身を委ねなさい。全てを、委ねなさい。」

その声は僕の奥底の響いて、中心部に凝り固まっていたしこりを解きほぐしていく。

「お前のこの瞳を取り去ってあげよう。」

そう言うと、おっさんは僕が目蓋に指を突っ込んで目玉を取り出してしまった。まずは左目、次に右目、両方の目玉を取り出すのには十秒もかからなかった。取り出した目玉は視神経でぶら下がっていて、頬の辺りに垂れ下がっている。次におっさんは爪を立ててその視神経を千切った。

こうして、僕は光を失ったが、不思議と痛みは無かった。もう何も見えない。けれども、目の前にいたおっさんがいつの間にかレミさんに代わっているのが分かった。

「レミさん、そこにいるんだね。」

「ええ、もう何処にも行かないわ。ずっと、あなたのそばにいる。」

「ああ、嬉しい。僕ももう迷わなくていい。レミさんだけを見ていることができる。」

二人はひしと抱き合う。

漆黒の闇の中、二つの純白な魂が輝き、それらは次第に近づき、やがて一つになる。一つに。もう二度と、離れることもなく、永遠に闇を照らす。

急に眼を覚ます。ガバッと起き上がって周囲を見渡す。見慣れた自分の部屋。隣には誰もいない。

夢だったのだろうか？それにしてもあまりにも、何とえばよいのだろうか鬼気に迫り過ぎていた気がする。いや、あれは本当に僕の身に起こったのだ、と思う。僕とレミさんはお互いが失われたもう片方を見つけ、かっちりとハマって一つになった。ただそれが故、レミさんは僕になって、いなくなってしまったんだろう。何だかやっぱり悲しかった。

苦悩の果てに、人生で一番に必要としていたもの、共鳴する女性を見つけ、喜びに噓び、二人が一つになることを望み、身体を摺り寄せて交わり、終にはそれを果たした。しかし、その結果また一人になってしまった。

分かり合おうと望みながら、お互いが別であり個である間にしかそれを分かち合うことができない。なんと皮肉なことであろう。

「だって、生きてるんだもの。」

二人が始めて交わったときに、レミさんが僕に言った言葉。それが哀愁をもって僕に染み渡る。

ああ、これからどうして生きよう。そう思って拳を握り締める。と、その拳に何かがあることに気がつく。果たしてそれはクシャクシャになった紙切れであった。開いて皺を伸ばすと、そこには文字が書き付けられている。それを読む。と、読んだ先から止め処なく涙があふれ出てくるのを禁じえなかった。

以下がその紙切れに書かれていた言葉である。そして、これをもってこの話を終わりにする。

「ポチ、目覚めましたか。隣に私がいなくてびっくりしたかも知れません。でも、許してください、それは致し方のないことなのです。そして、そんな事とは何の関係もなく、あなたの時間は進み続けます。ですから、あなたの見たくない物はこれからも止め処なく、あなたの瞳に映り続けます。そのためにあなたは血を流し続けるのです。さらに残酷なことにはあなたはもう二度と、私とあなたがそうした様には、誰かと交わり溶け合うことはできないかもしれません。でも、嘆き悲しまないでください。だって、そんな現実が、その痛みそのものが、希求するその過程こそが、生きることであり、あなたなんですから。あなたがこれからの人生でほんの一瞬でも幸せを感じられたらと、心から願っています。さようなら。レミ。」

瞳

<http://p.booklog.jp/book/17394>

著者：オパーリン

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/opaarinn/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/17394>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/17394>